詩吟のない生活は考えられません

吉田松陰顕彰吟詠コンクール全国大会で優勝

真下　正一さん　72歳
粕川町女渕

4月に山口県萩市で行われた吉田松陰顕彰吟詠コンクール全国大会の和歌・俳句の部で、見事優勝に輝いた。萩市出身の思想家・吉田松陰の和歌や俳句、漢詩を吟じるこの大会。松陰の魂を理解し広めることを目的に毎年開かれている。

「知人に勧められて初めて参加しましたが、優勝できるとは思っていませんでした。大変光栄です」

吟じたのは和歌「身はたとい」。死が目前に迫りながらも、国のことを強く思う松蔭の心を表現した。テクニックを使うことよりも、本人の気持ちになり切ることを心掛けたという。

「松蔭には以前から人としての魅力を感じていて、3年前には足跡を訪ねるため萩市を旅行しました。その時に買った本は、かなり読み込んでいますね」

人前で歌を歌えるようになりたいと思い、約40年前に始めた詩吟。今ではすっかり生活の一部になった。15年前から妻の京子さんも一緒に学ぶようになり、今大会の合吟の部で入賞した。

「妻と旅行に行くと、二人とも歌碑などに目が行きます。詩吟を始めてから旅の楽しみが増えましたね」

趣味は野菜作り。取れた野菜は家で食べるほか、友人たちにも配り、おいしいと喜ばれている。

「野菜は手間を掛けた分だけ良い物ができます。努力は惜しみません」

詩吟や野菜作りは人生に深みを与えてくれると語る。これからも何事にも意欲的に、充実した日々を送ってほしい。

未来への贈りもの

本市収蔵作品

中村節也『グランドキャニヨン』昭和37年

油彩・カンバス（130・0センチメートル×97・0センチメートル）

「絵は愛なり」。これは画家・中村節也さん（明治38年―平成3年）が、制作の理念にしていた言葉です。東京美術学校（現・東京芸術大学）で卒業制作に取り組んでいた際、突如夢の中に浮かんできたもので、その時は言葉の意味が理解できなかったといいます。

それから約30年後、アリゾナの断崖でグランドキャニオンに対峙した時、自然の中には何一つ無駄なものはなく、全てのものは美の構成要素であり、それらをおろそかにしないという「愛」で表すのが絵であると悟りました。

本作品は、その時に見た雄大な自然の美しい情景を表現したものです。夕暮れ時、あかね色に染まった空が刻々と変化していく様子を、パレットナイフを使用し、力強い筆使いと優れた色彩感覚で描いています。

邑楽郡邑楽町に生まれた中村さん。その日が天長節（現在の天皇誕生日）だったことから、「節也」と名付けられました。9歳の時、父の転勤で国領町に転居。前橋中（現・前橋高）在学時に絵画を始めました。その後、東京美術学校で油彩画を学び、二科展など、さまざまな公募展で入選、受賞を重ねます。戦後は高崎に移り、独立美術協会の重鎮の一人として作品を発表するとともに、県美術会会長も務め、群馬の美術の発展に尽力しました。

問い合わせは　文化国際課　☎898―5825

クローズアップ CLOSE-UP

こどもの日をエンジョイ

5月5日、児童文化センターで「こどもの日のつどい」を開催。こいのぼりコンサートや科学教室などを行い、多くの子どもでにぎわいました。わくわくチャレンジコーナーでは、こいのぼりけん玉を作成。大学生に教わりながら、自分だけの作品を完成させました。

咲き誇る色とりどりのツツジ

5月3日から5日まで、敷島浄水場の一般開放を行いました。43種370本の色とりどりのツツジが満開を迎えた会場には、3日間で9,784人が来場。施設説明会や水の試飲会、花の種の配布も行われ、多くの家族連れなどでにぎわいました。

無理のない介護予防を学ぶ

前橋プラザ元気21で4月24日、「高齢者のためのらくらくアンチエイジング教室」を開講しました。これは、市民協働事業の一つで介護予防の推進が目的。これから1年間、ランニングなどの運動を通じ、自分に合った方法で心身機能の維持に取り組んでいきます。

天まで届けこいのぼり

4月24日、市役所3階屋上庭園でこいのぼりの掲揚を行いました。児童の健やかな成長を願うこの催しに、第四保育所の児童が参加。元気に歌った後、力を合わせてこいのぼりを空へ。気持ち良さそうに泳ぐ姿を見て、みんなの笑顔がはじけました。